

3 学校設定教科「あしがら」(2学年)

(1) 学校設定科目「未病」

ア 目的

未病に関する基本的な知識を身に付け、地域に必要な健康プロジェクトを推進する中で、主体的・協働的に課題を発見し解決する過程を通して、自己肯定感を育み、地域貢献できる人材を育成する。

イ 対象生徒

2学年(196名)

ウ 活動内容

a 共通

室内で行ったロコモ度テストを通して、移動機能の状態を確認し、正しいテスト方法や年代による移動機能の低下について学んだ。

b 東洋医学コース

① 未病と東洋医学についての講義

神奈川衛生学園専門学校東洋医療総合学科から講師を数回招いて、未病という概念の復習や東洋医学の考え方について学び、ツボ押しや経絡ストレッチの実践を通して理解を深めた。

② 健康づくりについての講義

総合型地域スポーツクラブ「松田ゆいスポーツクラブ」から講師を招き、スポーツクラブで行われている「年代に合った運動能力を伸ばすプログラム」について説明を受け、年齢によって身に付きやすい身体能力について学んだ。



③ グループ分け、テーマ設定

講義で聞いたことを踏まえて、改善ツール・予防ツール・未病イベントのどれを考案したか、また、どの年齢層に向けたものを作りたいかを考えさせた。選んだ方向性によって教室分けとグループ分けを行い、グループの中でテーマや対象年齢を改めて設定した。

④ 情報収集、成果物作成

設定した年齢層向けのを考案するために、どんな情報が必要なのか、何が課題として考えられるのか、周囲を参加させるには何に注意したら良いのかをグループで議論し、イン

ターネットや書籍等で調べ学習を行った。動画や写真で健康づくりを訴えるグループは、分かりやすく親しみやすいものを作るよう心掛けて撮影を行った。



⑤ 発表準備

分かりやすい、聞きやすい発表を目ざして、スライドを作成した。また、中間発表を行うことで、進捗状況の確認と各グループへのフィードバックを行った。

c 未病普及コース

カタパルト株式会社の佐藤氏を講師として招き「新型コロナウイルス感染症感染拡大における課題とその解決」をテーマに探究的な学習を進めた。

① アイスブレイクとグループ編成

今回の未病普及の探究テーマの確認とアイスブレイクを行うとともに、3人1組のグループを編成した。

② 課題抽出

新型コロナウイルス感染症感染拡大前後での生活様式の変化等の課題を、グループに分かれたワークショップ形式で確認し、課題の抽出を行った。講師と担当教員がファシリテーターとして入り、円滑な議論が行われた。



(「未病普及コース」授業風景)

③ フィールドワーク

各グループの設定した課題について調査・取材するためにフィールドワークを計画した。取材先を精査したのちにアポイントメントを取り、10月15日(木)に実施した。また、後日リモートでの取材も行った。



(リモートでの取材風景)



(取材風景)

④ 発表準備

フィールドワークで得た根拠をもとに、スライドを作成した。講師と担当教員がファシリテーターとして入り、グループでの議論を活性化させた。また、毎時の中間発表を通して、進捗状況の確認と、各グループへのフィードバックを行った。



d コース別校内発表会

12月17日(木)の校内発表会では、各グループでスライドや模造紙等を用いてロジカルに発表を行うことができた。また、発表会に参加した外部の方からも高い評価を得ることができた。

(学校設定教科「あしがら」コース別発表会の頁参照)



エ 成果及び評価

コース選択を取り入れた授業を展開したため、人数のばらつきがみられたが、生徒はそれぞれの興味や進路に応じたコースを選択することにより、興味・関心が得られ、学びが深まった。

企業や総合型地域スポーツクラブ、専門学校など校外の方々ที่ファシリテーターとして参加することにより、それぞれの学習内容に応じたアドバイスや専門的知識が得られ、スムーズな展開の中で学びの深まりを感じることができた。

オ 今後の課題

生徒の学習の内容に応じた校外の学びの場を提供できるよう、学校と外部の団体をつなぐ人材や組織体制の構築が必要である。

今年度は、コロナ禍のため制限のある中での学習となったため、計画通りに進めることが難しかったが、今年度の成果をうまく活用し柔軟に運用できる年間計画の作成が課題である。

(2) 学校設定科目「地域防災」

ア 目的

- ・ 災害に関する基本的な知識を身に付け、災害に対応できる力を養成する。
- ・ 主体的・協働的に課題を発見し解決する過程を通して、自己肯定感を育み、地域貢献できる人材を育成する。

イ 対象生徒

2 学年（196 名）

ウ 活動内容

a 防災の基礎知識習得

新型コロナウイルス感染症の影響による学校休業中に、課題による防災学習を行った。1 学期は、防災に関する基礎知識を習得する時期として位置付け、以下のような課題に取り組みさせた。

課題① 災害時の食と栄養の確保について

災害時の心の健康について

山北町における災害弱者について（いずれか1つを選択してレポート作成）

課題② 新型コロナウイルス感染症による緊急事態宣言下で災害が起きた場合に想定される問題点と対策について

課題③ 過去の火災災害（京都アニメーション放火殺人事件、関東大震災、糸魚川大火災、阪神淡路大震災、首里城火災）の原因・火の広がり方の特徴・被害状況・消火にかかった時間について

課題④ 火山噴火の予知、必要な備え、噴火による被害、必要な支援について

課題⑤ 課題①～④で学んだ内容を踏まえた防災散歩レポート作成（自宅近隣地域の災害時の危険個所を見つけ、想定される被害と対策について）

また、登校が可能になってからは、以下のような課題に取り組みさせた。

課題⑥ 学校内で災害時に危険な被害が想定される箇所を探す

課題⑦ これまでに学んだ内容を踏まえて、防災に強いまちを描いてデザインする

2 学期以降は、HUG コース、DIG コース、酒匂川未来コースの3つに分かれた探究活動を行い、コース分けは、生徒の希望に沿う形とした。2 学年担当教員のうち、防災担当教員7名を3コースに分けて配置し、授業づくりに当たった。

b HUG コース

① 山北高校の避難経路について

山北高校は広域避難所に指定されているため、災害時に地域住民が避難してくる。災害の時間帯によっては、学校職員だけでなく生徒も避難者の誘導などの避難所運営に関わる可能性があることを生徒に理解させた。

今回の授業では、「山北町で震度6弱、津波の心配はない」地震が起こった場合に避難所としての山北高校で起こり得る以下の3つの課題についてグループワークを行った。

課題① 体育館への避難者の誘導ルートの設定方法

課題② 避難者名簿の作成方法と作成に向けて準備するもの

課題③ 不足するトイレについて備える方法

② クロスロード

避難所生活で起こる様々な問題について、以下の8つの設問に対する YES 又は NO の判断を行う活動をした。さらに相互に意見を交わすことで、反対の考えの理解を深めた。

設問① 避難してきたが、校舎に鍵がかかっている。窓を割りますか。

設問② 避難所に入りきれない。隣町の人に場所を移ってほしいとお願いしますか。

設問③ ペットを連れて避難してきた老人がいる。ペットを避難所に入れますか。

設問④ 近隣の避難所が満杯になり、帰宅困難者が避難してきた。どうしますか。

設問⑤ 避難者の人数に対し食料が不足しているが、今ある食料をどうしますか。

設問⑥ 避難所を取材したいとテレビ取材スタッフが来たが、取材を受けますか。

設問⑦ 毛布は避難者に1枚と決めているが、2枚欲しいという避難者がいる。どう対応しますか。

設問⑧ 発災から1か月が経ち、援助物資の古着が余っているが保管場所がない。古着はどうしますか。

③ 実際に起きた避難所トラブルを知る

東日本大震災などのこれまでの災害における、避難所生活で実際に起きたトラブルについて調べた。そして、そのトラブルを少しでも少なくする方法についてグループで話し合い、協議して共有させた。

食料確保、健康管理、防犯対策、性犯罪対策等さまざまな問題が挙げられた。

④ ボランティアの5つの要素

自発性・社会性（公共性、公益性、福祉性、利他性）・無償性・先駆性・継続性（責任性）を理解させ、ボランティアに参加する際、どのような心構えで対処するか考えさせた。

⑤ 身近な材料で避難所グッズ製作

避難所生活を少しでも快適にできるよう段ボールでベッド、スリッパ、簡易トイレ及び、大きいポリ袋を用いてシェルターを作った。

製作する際、Chromebook を使ってNHKの「つくってまもろう」のホームページの動画を視聴しながら作り方を学んだ。動画で学んだ内容にとどまらず、それぞれで工夫を加えていたグループもあった。例えば、トイレに蓋を付けたり、寝る際、周りの目が気にならないようなパーテーションを独自に考えたりしていた。また、ベッドについては実際に使ってみて強度を確かめ改善するなど、試行錯誤を繰り返していた。枕を新聞紙で作るアイデアを出していた生徒もいた。考えながら実際に体を動かす作業を楽しんでいる様子が多く見受けられた。

製作終了後、意識した点・改善点などをグループで考えさせた。今回生徒が作った避難所グッズはいざという時に使えるように学校で保管している。災害時には、今回 HUG コース

生徒が率先して必要なものの作り方を避難者に指導することを期待している。



Chromebook で動画視聴しながらの作成



トイレの中には丸めた新聞紙を入れる



実際に寝てみて強度を確かめる



段ボールの中の工夫でベッドの強度を高める

⑥ 避難所運営ゲーム (HUG)

これまでの授業で学んだ内容を確認したうえ、実際に避難所運営ゲーム (HUG) を行った。避難所運営ゲームとは、学校の敷地内配置図に避難者を模したカードを適切に配置していく、というものである。避難者のカードには、避難者の年齢や家族構成、健康状態、国籍などの情報が記載されている。リーダーがカードを1枚ずつ順番に読み上げていき、プレイヤーは避難者カードが読み上げられる順に避難所敷地内のどこかに配置しなければならない。1枚のカードを配置するのに与えられる時間は約10秒であり、素早い判断が求められる。リーダーは避難者カードの他にイベントカードも読み上げる。イベントカードの内容は、天候状況の変化や近隣の避難所の状況、食料物資の配達状況やテレビ取材依頼など多岐に渡る。プレイヤーは、避難者の配置と同時進行でイベントカードの対応も考えなければならない。

今回生徒は6名ほどのグループを形成し、HUGを体験した。新型コロナウイルス感染症の影響も考慮しつつ、体調不良者の対応に頭を悩ませる様子が見受けられた。



避難者カードを配置する様子



避難者の情報を読み、配置場所をグループで議論

c DIG コース

- ① 山北町役場発行の防災マップを活用し、厚紙5枚貼り合わせて100メートルとした山北町の立体図を作成した。



等高線を丁寧に追いかけて型紙を作る。



型を合わせてカット後、5枚貼り合わせる。



4チームの成果物を合体させる。



ハザードマップから課題解決の議論をする。
グループごとにDIGの準備。

- ② ①で製作した立体図を活用し、「水害」「地震」「噴火」の3グループに分け、探究活動を展開した。

● 「水害」グループ

酒匂川水系の、豪雨被害を、万治3(1660)年まで遡って状況調査し、堤決壊や土手切れ

被災地を立体地図上にマークした。結果、勾配の強い渓谷部から扇状地に接続する地域や、河川の蛇行の強い地点のインフラの強靱化対策が急務と言える課題箇所が明確化された。

● 「地震」グループ

ハザードマップや断層マップを検索するとともに、関東大震災時の被災状況や東日本大震災時の風評被害などを検証して、立体地図上に断層帯を明示した。結果、初期対応の避難所の活用に課題があることや妊婦と高齢者の対応などの検討も必要であることが分かった。また、阪神淡路大震災の被害状況などの検証から東名高速道路と都夫良野トンネルや国道 246 号線及び JR 御殿場線の谷峨鉄橋など、インフラの強靱化について課題意識を持った。

● 「噴火」グループ

富士山の宝永大噴火での焼砂堆積による被害状況と、火山灰層の土地活用での影響等を調査し、集中豪雨時の土手切れや土石流発生、堤防決壊や通水不能被害の箇所を明確化し、結果、災害発生が予測される地域的課題をまとめた。水はけのいい土地柄であることが焼砂堆積と関係していることも理解することができた。

d 酒匂川未来コース

- ① 酒匂川の基本的な知識（地理や歴史、水害）を得るため、ワークシートを作成し、それに沿って調べ学習を行った。このコースでは、「酒匂川ふるさと絵本」の作成に関わりつつ、酒匂川や酒匂川にまつわる災害などについて学習した。同絵本について基本的な知識を得るために酒匂川ふるさと絵本作りのキックオフイベントの動画（インターネットで視聴できる）を見て、絵本作りの考え方を理解した。
- ② 本コースでは、先述した通り環境省「森里川海プロジェクト」の一環として行われている「酒匂川ふるさと絵本」に参加した。具体的には、酒匂川の流域の伝統・文化・生活などについて地域住民から集めたアンケートを分類・整理する作業を行った。アンケートを読み、関係のあるものをいくつかの大項目に分類し、模造紙に貼り付ける形で整理していった。分類・整理したアンケートは、イラストなどを添えて視覚効果を意識した制作物「酒匂川イメージマップ」として模造紙一枚にまとめ、校内で展示発表を行った。また、本校生徒は参加できなかったが、酒匂川ふるさと絵本作りの一環として行われたイベントにも出展し、参加者に披露された。



③ 酒匂川イメージマップを作る過程で疑問に感じたことや「もっと知りたい」と思ったことを整理し、ワークシートにまとめた。このワークシートをもとにして、地元のことを熟知する住民の方（毎回3名が来校）からインタビュー形式で話を聞き、より深く酒匂川の歴史や防災などについて理解を深めた。また、生徒が知らない酒匂川の今昔について様々な話をしてくださり、聞き取ったことを生徒はワークシートに記録として残した。酒匂川について学ぶだけでなく、より深い地域理解につながったほか、同世代で固まりがちな高校生が異なる世代と交流を持つよい機会ともなった。

e まとめ・発表

各コースで経験した内容から考え、探究活動を通してその内容をまとめ、12月17日（木）の校内発表会に向けて準備を進めた。酒匂川未来コースについては、作成した模造紙を当日掲示した。

エ 成果及び評価

本科目を通して、生徒は防災についての基礎知識を得ることができた。また、実際の災害を想定して対応を考える中で想像力や創造力が養われた。また、12月17日（木）の発表のためにスライド等を作る中で、まとめる力とプレゼンテーション力が向上した。

オ 今後の課題

レポート課題への取組や実習等を評価の判断材料としたが、客観的に評価できる指標を作成するなど、評価の観点の整理がさらに必要であり、今後の課題である。

災害への備えや、被災後の対処について思考を巡らせることができたが、災害発生メカニズムなどを学習する機会を持つことができなかった。この反省を活かした年間計画を見直すことが必要である。